



Data

監督：スサンネ・ピア
 脚本：クリストファー・カイル
 出演：ジェニファー・ローレンス/
 ブラッドリー・クーパー/ト
 ビー・ジョーンズ/リス・エ
 ヴァンス

■■■ショートコメント■■■

◆今やジェニファー・ローレンスはハリウッドを代表する若手女優の一人で、『あの日、欲望の大地で』（08年）（『シネマルーム23』38頁参照）、『ハンガー・ゲーム』（12年）（『シネマルーム29』234頁参照）、『世界でひとつのプレイブック』（12年）（『シネマルーム30』30頁参照）、『ハンガー・ゲーム2』（13年）（『シネマルーム32』未掲載）、『ハンガー・ゲーム FINAL：レジスタンス』（14年）（『シネマルーム36』未掲載）等の大ヒットを飛ばしている。さらに3月30日公開の『レッド・スパロー』（18年）では誘惑と心理戦を武器とした女スパイ役に挑戦！他方、ブラッドリー・クーパーは『アメリカン・スナイパー』（14年）（『シネマルーム35』24頁参照）等でお名だ。

その2人は『世界にひとつのプレイブック』、『アメリカン・ハッスル』（13年）（『シネマルーム32』33頁参照）等で共演している。ところが、この2人が共演した2014年製作の本作はずっと日本で公開されず、なぜか2018年の今「未体験ゾーンの映画たち2018」でやっと公開された。それは一体なぜ？

◆本作の監督が、私の大好きなデンマークの女性監督スサンネ・ピアだと聞いて、私はさらにビックリ。スサンネ・ピア監督の過去の作品については、『ある愛の風景』（04年）（『シネマルーム16』70頁参照）、『アフター・ウェディング』（06年）（『シネマルーム16』63頁参照）、『悲しみが乾くまで』（08年）（『シネマルーム19』245頁参照）、『未来を生きる君たちへ』（10年）（『シネマルーム27』177頁参照）、『愛さえあれば』（12年）（『シネマルーム31』62頁参照）、『真夜中のゆりかご』（14年）（『シネマルーム36』151頁参照）等、そのほとんどを鑑賞し、星4つ、星5つをつけてきた。

タイトルからして、本作はジェニファー・ローレンスがヒロインのセリーナを演じるのだろうが、さてそのテーマは？時代は？またその内容は？

◆アメリカでは西部劇は多いし、西部開拓史も多くの映画で取り上げられているが、石油

開発をテーマにした映画は、ジェームズ・ディーン主演の『ジャイアンツ』（56年）等珍しい。また、本作に見る1929年当時の、アメリカノースカロライナ州のグレート・スモーキー山脈のほとりでジョージ・ペンバートン（ブラッドリー・クーパー）が営む製材所の仕事映画に取り上げられるのも珍しい。

ある日、火事で家族を亡くした天涯孤独の美女セリーナ（ジェニファー・ローレンス）が馬に乗っている姿を見て一目惚れしたジョージ・ペンバートンは直ちに結婚を申し込み、2人は深い愛で結ばれることに。

今でこそアメリカでの女性の権利は強くなったが、西部開拓史当時の女は飾り物だったはず。しかし、本作に見るセリーナは製材所の仕事に通じているほか、ジョージのビジネスパートナーとしても実力を発揮。セリーナはジョージの他のパートナーとも、当初はうまくやっていたが・・・。

◆2大スターの共演、しかもスサンネ・ビア監督の本作がなぜ日本で今まで未公開とされてきたのかは、本作の展開を見ていると何となくわかってくる。つまり、いまいちストーリーに納得感がなく、“炎の女セリーナ”も『風と共に去りぬ』（39年）のスカーレット・オハラほどの魅力がないわけだ。しかも、本作のストーリー構成の核になっているジョージのもう一人の女とその女との間に生まれた男の子というポイントもストーリーの“伏線”としてのインパクトがイマイチ。そのため、どうしても感情移入が不十分に……。しかして、何となく欲求不満のまま鑑賞を終わることに……。

2018（平成30）年3月28日記